

出島表門橋完成

“世界とつながる長崎・出島”

長崎市文化観光部理事兼
出島復元整備室長 馬見塚 純 治

はじめに

平成29年11月いよいよ出島表門橋が完成します。かつて長崎の町と出島をつなぐ唯一の橋があった場所に130年ぶりにかかる橋によって、再び長崎の町と出島が昔のようにつながります。その橋を渡って入る出島の中には、19世紀初頭の復元建造物による町並をはじめ幕末の石倉、明治期の洋風住宅など、日本の近世近代を物語る空間が広がります。

出島の歴史を振り返りながら、世界とつながる長崎と日本の近世近代を再確認し、出島の復元事業とユニークな構造をした出島表門橋の誕生の裏側、そして長崎の未来についてまとめてみます。

1. 世界とつながり続けてきた長崎

長崎市は、目指す都市像を“個性輝く世界都市、希望あふれる人間都市”と定め、“つながりと創造で新しい長崎へ”を基本姿勢にその実現に取り組んでいます。

元亀2年（1571）ポルトガル船の来航と

もに“世界都市”長崎は誕生しました。それ以来、16世紀から現在に至るまで長崎は、脈々と世界とつながり続けてきました。

各県庁所在地と比べても、多くは平野の中に位置し、城を中心に城下町を形成し領民と彼らが生み出す農産物（石高）が都市の経済を支えていた時代にあって、世界との貿易と御奉行のもと町人による自治で発展してきた長崎は、誕生から発展の歴史そのものが都市の個性であり魅力であるといっても過言ではありません。

まずは、出島を歴史の縦軸に世界とつながり続けてきた長崎の歴史を4つの時代に分け振り返ってみます。

第1の時代 世界都市長崎誕生（出島前夜）

日本最初のキリシタン大名大村純忠によりポルトガル船を誘致するために築かれた長崎には、瞬く間に九州や西日本を中心に商人達が集まり活気を帯びてきました。ポルトガル船は貿易とともにキリスト教の布教を進め、長崎の町には教会が立ち並び、多くの人々がキリスト教徒となっていました。

しかし、織田信長から豊臣秀吉の時代へと変わり、天下統一が進められていく過程で、長崎の町と港は、大村氏から豊臣政権下の直轄地、いわゆる天領になります。徳川幕府の時代にも天領として引き継がれ明治維新までその体制は続きました。

この最初のポルトガル船の長崎来航から出島が完成する寛永13年（1636）までの65年間は、ポルトガル人は町の中で長崎の町人とともに暮らしていました。そのため日常生活の中に、カステラ、有平糖、テンプラ、ヒカドなど食文化を始めとしたポルトガル時代の影響を見つけることができます。

この間、前半をキリスト教の布教と拡大の時代とすると後半は、次第に禁教と弾圧の時代となり、多くの人々が棄教する中、一部のキリシタンは潜伏の道を選びました。その最終段階で、布教を禁じながら貿易を継続する政策として出島の築造が始まりました。

その意味では、出島はその築造の経緯そのものが、世界遺産登録を目指す“長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産”を語る上でも重要な史跡であると言えます。

第2の時代 出島築造と日蘭交流

出島は、寛永13年（1636）に完成し当初の目的通り、それまで長崎の町の中で暮らしていたポルトガル人が移り住みました。しかし、翌寛永14年（1637）に島原・天草一揆の後、ポルトガル船の来航は禁じられ、一時出島は空き家になりました。

寛永18年（1641）、それまで平戸で貿易を

行っていたオランダ東インド会社（VOC）の商館が出島に移され、安政6年（1859）廃止されるまでの218年間、オランダがヨーロッパと日本との貿易を独占的に継続することとなりました。

17世紀後半から18世紀初頭、オランダは黄金時代を迎えますが、やがて数度の英蘭戦争ののちイギリスの時代へと変わっていきました。世界最初の株式会社と言われたオランダ東インド会社も寛政11年（1799）巨額の負債を抱え倒産し、出島での貿易も途絶えかねない危機的な状況を迎えましたが、オランダ領東インド政庁が日本との貿易を引き継ぎました。



展示：オランダ東インド会社の拠点バタフィア（現ジャカルタ）

日蘭貿易の約200年間を見ると、日本では平和な時代が続きましたが、ヨーロッパにおいては、フランス革命、アメリカのイギリスからの独立、ナポレオン戦争などの戦乱が続く、オランダ本国も一時フランスによる併合など激動の時代を迎えていました。

また、イギリス発の産業革命がヨーロッパに広がり、新たな資源や市場を求めアフリカ、アジアなどへ植民地政策が広がっていきまし

た。そのような時代の中にあっても、出島での日蘭貿易は、武力ではなく交渉により平和的に継続され、相互の経済や文化の発展に貢献してきました。このように世界経済や貿易の視点から見ても非常に稀なケースとしてとらえることができます。

このような出島の特徴を生かすため、昨年完成した復元建物の筆者蘭人部屋では、“世界とつながる出島”をテーマにグラフィックや映像を使い、出島とのつながりがあった世界の国々をできるだけ多く取り上げ、来場者の皆さんに自分たちの地域も世界貿易で出島とつながっていたという当事者感が伝わるように心がけています。



展示：オランダ東インド会社の貿易品の流れ

出島が果たした役割でもう一つ重要なものは、西洋の医学や自然科学の分野の知識、いわゆる蘭学の導入です。既に18世紀後半から蘭学は学問として出島から国内に広がりつつありました。そういった中、19世紀半ばアメリカのペリー提督率いる黒船の来航をきっかけに、開国と近代化へと時代が大きく変わっていきます。

この時、幕府はオランダに協力を依頼し長崎に海軍伝習所を開設しました。教官や技術者は、出島に滞在し、奉行所（現在の県庁）の中で様々な分野の授業が始まり、オランダから贈られた観光丸を使い長崎から天草周辺の海域で航海の実習が行われました。航海術の習得だけではなく蒸気機関の修理等のために飽浦に作られた溶鉄所は、三菱造船所の原点となり、同時に行われた医学伝習は、後の長崎大学医学部の原点となりました。

これらは“明治日本の産業革命遺産”にも大きな影響を与えており、出島は、長崎の2つの世界遺産(候補)を語る上で欠かせない歴史とストーリーを持つ重要な史跡といえます。

第3の時代 開国と出島の変遷

安政6年（1859）以降は、長崎、横浜、函館に新設された外国人居留地で広く欧米との貿易が行われるようになりました。出島のオランダ商館も廃止され領事館が置かれ、独占的な貿易の役割を終えました。もはや出島は海で囲まれた島である必要はなくなり、幕末から明治にかけて、次第に周囲の埋め立てや、北側の江戸町に面した護岸の掘削などにより大きく姿が変わっていきました。

鎖国政策のもと、海上に隔離されていた出島と長崎の町をつないでいた唯一の石橋も撤去され、明治37年（1904）出島の扇形の姿は完全に消え去り、まちの中に、そして歴史の中へと埋没していきましたが、大正11年（1922）になり歴史的価値が評価され「出島和蘭商館跡」として国指定史跡に指定されました。

開国後、明治維新を経て欧米に追いつくため近代化を進め富国強兵の道を歩んだ日本は、皮肉なことに、日清戦争、日露戦争、第一次・第二次世界大戦と、鎖国期に築いていた世界とのつながりを失いながら原爆と終戦への歴史をたどりました。

第4の時代 出島の復元

出島の復元事業が動き始めたのは戦後の復興もまだ始まったばかりの昭和26年（1951）のことです。オランダ政府と日本政府の協議を経て、長崎市が主体となり史跡の公有化及び整備事業が始まりました。



庭園（ミニ出島周辺）整備前の出島

初めに当時公有化された場所に残されていた石倉の部材等を使いながら幕末の石倉の復元や庭園の整備などが進められました。やがて、出島の全体をイメージしやすいミニチュアの出島も設置されました。

一方で、昭和50年代になると部分的な整備ではなく出島全体の復元を視野に入れた基本構想の検討が始まり、平成8年（1996）に、現在の復元事業につながる事業計画が策定されました。この計画では、200年以上に及ぶ

江戸時代の出島の歴史の中でも資料が豊富に残され、シーボルトたちが活躍した19世紀初頭の出島を復元することとし、史跡内の建造物の復元や出島の周囲の石垣の顕在化、および表門橋の架橋などからなる短中期計画と、出島の周辺を海水で囲み完全復元を目指す長期計画が定められました。

このうち、短中期計画は、出島の範囲確定調査と周囲の石垣の顕在化を終え、復元建物も平成12年（2000）から、平成28年（2016）までに16棟が完成し往時の町並が甦り国内外からの来場者で賑わいを見せています。



19世紀初頭の町並

2. 出島の世界的価値と評価

ここで出島の史跡としての特徴を確認してみましょう。これは史跡を保存し復元などの活用を進める上で大変重要になってきます。

①海中に浮かぶ扇形の人工島

17世紀に海の中に築かれた美しい扇の形をした人工の島は、土木技術の点でも景観的な美しさという視点でも世界に類を見ません。実際に長崎港に浮かぶ出島を描いた絵画が国内のみならずオランダを始めヨーロッパにも

数多く残されていることがその価値を物語っています。

②鎖国期の日本におけるヨーロッパとの 唯一の貿易地

江戸幕府がとった鎖国政策の中で、出島はアジアのみならずヨーロッパとの貿易を行っていたことで、国内に様々な舶来の品々や情報をもたらしただけでなく、大量の銀や銅等の天然資源や肥前磁器を始め様々な工芸品などを世界に供給し、経済に貢献していました。

③閉ざされた空間における、異文化の相互 交流の場所

出島の中のオランダ人は、快適な暮らしを求め、ヨーロッパの文化は勿論、東インド貿易の拠点があったインドネシアをはじめとした東南アジアのライフスタイル等も出島に持ち込みました。出島の中では、様々な文化の相互交流が行われていました。

④歴史の重層性と連続性がみられる場所

出島は、ポルトガルとの貿易の時代からオランダ貿易の時代を経て、幕末開国後はプロシア（ドイツ）や明治以降のイギリスとの縁が深い旧出島神学校、旧長崎内外クラブ等現存する建物など17世紀から現代にいたるまで常に世界と関わり続けてきた歴史を語るができます。出島は日本の近世近代の歴史と世界史を考える上でも重要な場所です。

⑤学術的価値の高い文化財や資料を包含する場所

出島から発掘される様々な遺物は、焼き物、ガラス製品、動物の骨、日用品等様々な分野に及び、商館長の日記、帳簿、門番の日誌、



オランダ国立ライデン民族学博物館に残る出島の建物の模型

絵画、図面、模型など出島に由来する様々な一次史料が国内外に残されており研究の対象としてもユニークな史跡といえます。

このようにさまざまな分野で世界的な価値を有する出島ですが、国内での知名度はともかく世界での評価は、まだこれからで大きな可能性を秘めています。

3. 出島表門橋

国指定史跡内での建物の復元が進む一方で、架橋事業の検討も始まりました。建造物については、様々な調査や資料に基づきできるだけ忠実な復元を進めてきましたが、出島表門橋の架橋にあたっては、明治期中島川変流工事により往時の石橋が取り壊された際に、江戸町の方向に面した出島の北側護岸が大きく削られているため、当時と同じ場所に同じ規模、同じ材質（石）を用いて復元を進めることは、現段階では困難であると判断されました。また、復元ではない橋を架げるために史跡を削り、橋を支える橋台を作ることはできないことや、防災上、景観上の配慮など様々な条件が課せられました。

それでも、往時の橋があった場所に新たな

橋を架け、ここを渡って出島に入ることは、かつて海に囲まれた島であったことを実感するとともに、当時の人々と同じ動線、目線で建物の配置や役割を体感し出島への理解を深めることにつながり大きな意義があります。

復元ではない形での架橋方法等について文化庁との協議も行いながら検討を進めた結果、出島内に橋の基礎を設けないこと、川の中に橋脚を立てないこと、出島を主役として景観に溶け込むようなデザインにすることなどを基本に片持ち式による設計が始まりました。

こうして、誕生したのが最先端の技術による出島表門橋です。新しい日蘭交流、世界との交流を象徴する懸け橋として期待しています。



手前で橋全体を支える構造の出島表門橋

4. 世界とつながる長崎・出島

いよいよ130年の歳月を経て再び往時と同じ場所に平成の出島橋である「出島表門橋」が甦ります。

かつてこの橋を渡った先の出島の中は、東南アジアを経てヨーロッパへと続く貿易の拠点であり、世界の情報が集まるアクセスポイントであり、異文化交流の最前線でした。



2015年ジャカルタにてオランダ商館ヘリテージネットワーク設立総会開催

新しい橋の向こうには、復元が進む19世紀初頭の出島はもちろん、再び長崎が世界とつながるヒントがあるような気がします。

出島表門橋が架かる直後の12月には、出島で“オランダ商館ヘリテージネットワーク”の国際会議が開かれます。かつて、オランダ商館の貿易ネットワークでつながっていた国々の専門家が長崎に集まります。

交流のために築かれたまち長崎の未来は、これまでの歴史を活かし、また、グローバルの視点で新しいサービスを生み出しながら、世界とつながることを徹底し、交流の産業化を推進していくことで拓かれていくのではないのでしょうか。

出島の復元事業はそう語りかけているような気がします。

(参考) オランダ商館ヘリテージネットワーク
(オブザーバー含む)

インドネシア、マレーシア、タイ、台湾、日本、スリランカ、インド、ベトナム、オランダ